



女性村

ねぎぼうず 新聞

vol. 02

2022
Summer

ねぎぼうず

「井上勝江さんとその仲間展」での最初の出会い
みんなでワイワイ「女性村」シングルマザーと子どもの村づくりの話をしていた時、まったく唐突に、フジコさんが「ねえ、そこに私が子どもの時から弾いていたピアノいらない？」とおっしゃいました。世界的なピアニストとして独特な位置にいられるフジコ・ヘミングさんの申し入れを、その時はたぶん誰も信じなかったと思います。実際、長い間フジコさんと親交のあるカメラマンの中嶋さんも真偽のほどは「まさかあ」という思いだったとおっしゃっていた程です。



シングルマザーの激増、少子化の波は止まらず、わあ、このままいけば日本はつぶれるとはならないために、女性たちが生き生きと自然の中で輝く生き方をしたい。人生にリハーサルはありません。さあ、強く、度胸があって、根性と根気を持ち、あなたの未来をここから始めようという女性たち 飛び込んできて、下仁田に。

子ども達がこのピアノで音の楽しさを 知り優しさを味わってほしい

フジコ・ヘミング

「本当にフジコさんがそういいました？」と首をかしげていました。「子どもたちにピアノに触れて欲しい」とフジコさんはおっしゃったのです。ピアノ、猫、孤独、そんなイメージがフジコさんのイメージに定着していました。いづれもフジコ・ヘミングという稀有な才能と存在感と生き方に由来したものであり、その中に子どもという影はなかったと私は思っていたのです。しかし、その時フジコさんは本当に自分と長い歴史を共に歩いてきたピアノの落ち着き先を小さな里にそっと置くことを考えていたのかもしれない。世田谷の閑静な住宅地、小さなながらも坂道の先端にフジコさんの日本のお住まいがあります。木のおいのお部屋とあちこちに無造作に飾られたフジコさんの画が目に残ります。腰が悪いフジコさんは一歩一歩、そっとそっと歩いて、テーブルに着きました。私はとっさにまず、フジコさんの手を両手で包み撫でました。柔らかいふわふわした大きな手...先日の握手の感覚は今も私の感覚に鮮明に残っています。この手が、指が、あれだけ力強い、優しい優しい音色を心を届けてくれるのです。



日本こもりうた学会、設立しまーす!

人間っていいなあ
こもりうたがあった
私たちが住む
この地球の片隅の
どんな町やどんな村にも必ず
誰かがそっと口ずさむ
こもりうたがあった
その町や村の
風土や歴史に根ざし
そこに暮らす人びとの
かなしみや喜びを刻み込んだ
母なる愛に満ちた
こもりうたがあった
遠い過去から
ずっと歌い継がれてきた
こもりうたを
未来を担う子どもたちに
つなげていきたい
いのちとたましいの
原点としての こもりうたを
蘇らせ 見つめ直し
あなたと分かち合いたい
そんな学会が 生まれます!

《趣意書》

地震・津波・豪雨・猛暑などの自然災害、新型コロナウイルスの世界的大流行、そしてロシアによるウクライナ侵攻と、理不尽な出来事が次々と立ち現れています。これからも生き延びていけるのだろうかという不安に駆り立てられる日々の中、家庭において、学校において、職場や地域社会において、さらにはインターネット空間において、相手の心や身体を傷めつける不幸な事件が相次いで報じられています。

このような社会の中で今一番求められているのは、理不尽な出来事に打ち負かされない、人と人との豊かな関係を築いていくことであり、とりわけ、幼い子どもに「母なる愛」のぬくもりを感じさせてあげることではないでしょうか。こもりうたは、親子をはじめとする人間同士の豊かな関係の根源にある「いのちの讃歌」です。今日、こもりうたが果たし得る役割はきわめて大きく、これを学術的に研究することの意義もまた計り知れないと言えるでしょう。

現在、日本において、また世界全体を見渡しても、子守唄を研究する専門家の数は決して多くありません。けれども、幸いにして日本には江戸後期以来の、釈行智、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)、北原白秋、浅野建二、林友男を始めとする幾多の先人たちによって収集され記録されてきた、世界にも類を見ない数の伝承こもりうた資料があります。また、松永伍一、右田伊佐雄、尾原昭夫、酒井董美、山折哲雄、赤坂憲雄等の諸氏による優れた調査研究の蓄積があります。

今日、これらの資料や先行研究を活用しつつも、これまでの研究の主流を占めてきた「伝承こもりうたの歴史的・民俗的考証」に捉われず、音楽学、音声言語学、心理学、社会学、人類学、生態学、環境学、動物行動学、脳生理学、医学・看護学、保育学、介護福祉学等々、様々なアプローチによる学際的で総合的な「こもりうた学」を創出し展開していくことが求めら

れていると言えるでしょう。そしてまた、海外のこもりうた研究者との交流等を通じて、世界の子守唄を比較研究し、「人間にとって子守唄とは何か」を問い直す、普遍的で国際的な深さと広がりをもった組織としての構想も展望されます。

一方、日本らばい協会の事務局他に保管されている膨大な資料は十分に整理されないままの状態です。他にも全国各地の、物故者を含む郷土史家や民謡収集者の自宅書庫等に眠っている文献資料や音声資料は膨大な数に上るものと思われ、これらの散逸を防ぐべく、全国に幅広く呼び掛けて資料を送っていただき、一カ所に集めた上で、こうした資料を体系的に整理・分類してデータベースを作成するとともに、そのデジタル・アーカイブ化を進め、これを公開していくことが喫緊の課題となっています。

以上のように、学際的・総合的なこもりうた学の創出・展開と、こもりうたアーカイブの作成・公開が、本学会の事業内容の二本柱となります。従って学会活動も、大会や例会などの開催や学会誌・会報の発行といった定期的な研究交流の他に、専門的な知識や技術を持った担当者による継続的なアーカイブ作成の作業が行われる必要があります。こうした特殊性に鑑みる時、少なくとも当面の間は、本学会の会員数を大幅に増やして大掛かりな研究交流活動を行うことを目指すのではなく、個人会員以外に法人会員の枠を設けることなどにより、しっかりと財政基盤を固めた上で、上述の活動を地道に継続して遂行できる体制を整えていくことを目指したいと思えます。なお、日本らばい協会との提携関係の具体的な内容については、今後の検討課題といたします。

最後に、このような趣旨の下に構想される本学会の創設に対して、多くの方々のご賛同が得られ、ご支援・ご協力いただけることを心より祈念いたします。

(発起人代表・鶴野祐介)

「このピアノの方が私より価値があるかもよ」

「フジコさんがはにかむ声で言いました。——子供たちに触れて欲しいというイメージは私にはフジコさんになかったのですが？」

「私は、本当は子どもが欲しかった、でもできなかった。子供のことはずっと考えていたの」

「ところで今の子供たちは・・・」と私「私、思うのだけ道德という時間が無くなったと聞いてびっくり、驚いている。人の道っていうか、あめしるとか、こうしろとかじゃなくて、生きてくこととか、生活において大切なことと思うのに、やさしさとか、大切なこと教えられるなんて、びっくりしています。」

「人というのはあまり好きでない。話すこともね。あまり信用していない子どもころから、第二私には、国籍すらなかったし、母は私をずっと馬鹿だと言っていた、自分も自分は馬鹿だとほんとに思っていた。コンクールで賞を取って私は馬鹿じゃないんじゃないか、と思った。ピアノが好きとかじゃなくて弾かないと叱られたので頑張ったけど・・・」



「何をまとめたので、私は出来た本を読んでもいいですね。本当に自分で書くとしたら100歳になったら書きたい。」

「人はどうして優しくしないのか、平気で残酷な言葉や人が傷つく言葉を云うでしょう。猫は口を利かないけど、黙って聞いてくれて黙って音楽を聴いてくれる。うちの猫たちは人にいじめられたりしてみんな孤独、人にもなじまないの。今13匹います」

「フジコさんの言葉はひとつづつ含蓄にふれていました。」

「私ピアノという楽器、何かとてもヒステリックに聞こえてあまり好きではありませんでした。フジコさんのピアノを聴いて、ふわあと包まれる気持ちになりました。」

「ああ、それは教える方が力づく、叩くようにと教えているからですよ。男性的でいいなんてね。私、そんな事考えたことない。楽譜どおり正確に正しくなんて、そんな機械がすればいい。心が弾かせて、心に届くのが音楽だと私は思うから。」

「私フジコさんの本を読んでいて・・・」

「ああ、いろいろ本に書かれていますけれど、私は一字も書いていません。話したことが出来たら・・・そう思います。」

「フジコの部屋」と名付けられた部屋は床がビカビカに見磨き挙げられていました。みんなが見守る中とうとうピアノは部屋に入りました。ちよっと拍手が自然に起こり、ピアノの周りに皆寄っていき、そっと触りなげたりしました。

「誰か弾いてみて、という声で最初はいやいやしていた皆さんから、決死とばかり、それは美しい女性がピアノの前に座ってくださいました。」

「古市たかこさん、髪がピンクに、西洋のピアノにまさにぴったりの古市さんは、下仁田での最初のピアニスト滑らかに曲が流れました。」

「自分の心のままに行動するのがいい」としか言えないけど、世界の中でも戦争なんてまだ起きています。このあいだウクライナに300万寄付しました。届くかどうかわからないけど、それでもいいの。」

「フジコさんは搬出の梱包寸前最後にピアノに自筆のサインをしました。」



「待つて。とてもいい音色のピアノなの、ちよっと弾いてみますから。」



「フジコさんはフジコさんなのです。私と話している背後では、ピアノの輸送の準備が始まりました。」

「ピアノは世田谷から下仁田に向けて出発しました。下仁田の当日の温度はなんと40度を超えていました。」

「下仁田西牧小学校には校庭の花壇に花が咲き乱れ、多くの女性たちや関係者がピアノの到着を待っていました。」

「人口6500名の下仁田町への「シングルマザー応援の女性村づくり」の第一歩です。ここに多くの女性たちの知恵や才気と居場所ができる事を夢見て、みんなと一緒に作り上げること

「聞き手・西館好子」



「山で、毎日山が迫ってくる感じでしょう。何か、こんなことが出来るなんて嬉しいわ」

「子どもたちに音楽、音が出ることを楽しんでほしい」と願ってピアノを下さったこともあり、まゆずみ万千子さんのお孫さんにも弾いて欲しいとお願ひしておきました。おばあちゃんの陰に隠れてしまいました。 やっと慣れて弾いてくれましたが、とても楽しそう、また弾きに来てね」と